

李媛著『空海の字書 人文情報学から見た篆隸万象名義』

中野直樹

1、はじめに

空海等撰の『篆隸万象名義』は、現在では本文の大半が失われてしまった原本『玉篇』¹の全容をうかがう上で最上の資料である。また、本邦の字書・辞書史を研究する際においても極めて重要な情報を提供してくれる字書である²。著者の李媛氏は『篆隸万象名義』を研究するにあたって、国語学で長年培われてきた伝統的な手法だけでなく、近年隆盛してきた人文情報学的手法を用いて、新しい角度から『篆隸万象名義』を捉えなおそうとする。日本の字書・辞書研究の水準がまた一段と高くなりつつある昨今において、まさに待望の書といえよう。本稿は、本書を通読して私なりに考えたところを記したものである³。

2、目次

本書は三部構成となっており、目次は以下のとおり（（ ）内はページ数。以下同じ）。

序文 (i)

はじめに (1)

第1部 多漢字古写本のデジタル化

第1章 データベースの構築による情報処理学的な研究方法 (19)

第2章 篆隸万象名義の全文テキストと公開システム (53)

第2部 書物学から写本へのアプローチ

第3章 原本調査からみた篆隸万象名義における文字訂正の問題 (73)

第4章 篆隸万象名義の近世写本 (101)

第3部 デジタル化による写本の本文研究

第5章 埋字と脱字 (127)

第6章 字体と字種との区別から見た重出字 (195)

第7章 掲出字の文字同定 (235)

第8章 篆隸万象名義における漢文節の意味注記 (251)

第9章 大乘理趣六波羅蜜經釈文所引玉篇逸文による本文校訂の研究 (275)

¹ 著者は本書の中で、日本で原本系『玉篇』と呼ばれるものを、中国で一般的とされる原本『玉篇』と呼ぶ（このことは本書1頁の脚注に説明がある）。本稿でも著者に従い原本『玉篇』とした。日本で用いられる原本「系」『玉篇』という言い方は、原本そのものではなく原本の系統に属す本文を持つものという意味であると私は理解しているが、「系」を付けないとなると、原本そのものであると日本では捉えられかねない。本書に言う原本『玉篇』は必ずしも原本そのものだけを指していないことに、日本での用法に慣れた読者は注意されたい。

² 本稿では、掲出字が漢字で、なおかつ一定の規則で並べられたものを字書といい、それ以外を辞書という。

³ 本稿を投稿する前に著者の李氏にお見せしたところ丁寧な返信をいただいた。その返信の中で内容に関わることは本稿の脚注で使用させていただいた。御許可くださった李氏に感謝申し上げます。

おわりに (287)

参考文献 (293)

『篆隸万象名義』用例索引 (297)

各章の初出一覧は本書 291 頁にある。なお、本書は原拠論文に加筆・修正を加えたものであり、単なる論文集にはせず丁寧な編集がなされている。そういう意味で、これまで李氏の論文を見てきた読者もまた新しい気づきを得られることになる。以下各部について気づいたこと、感じたことなどを挙げる。但し、紙幅の都合上本書すべての内容に触れることはできない。したがって、私が特に注目した箇所や本文中には明記されないものの、著者が問題意識を持っていると考えられる背景等を中心に取り上げていくこととしたい。各部の概要は本書 4 頁から 7 頁および、287 頁から 289 頁に著者により示されている。

3-1、第1部 多漢字古写本のデジタル化

第1部第1章では、李氏が開発に関わる「HDIC」の漢字処理の方法などが、『篆隸万象名義』と『玉篇』を中心にして説明される。コンピュータ上で漢字を処理する際の問題点が丁寧に指摘されており、その解決方法も提示されている。漢字の処理をしていく中で、注文に使用された漢字の異なり字数が少ないことから、「注文部分は比較的理解しやすい文字を利用して掲出字を解釈するという性格が窺える」(35)といった指摘は、他の字書の注文などとの比較も必要にはなるが、『篆隸万象名義』の性格を考える上で漢字処理の副産物として出てきた興味深い指摘である。

同第2章は、写本で伝わる『篆隸万象名義』の全文テキストの電子化に際しての文字処理に関する章である。『篆隸万象名義』と同文を持つ資料(原本『玉篇』・宋本『玉篇』等)との比較の際に、テキスト化が済んでいれば、全文をコンピュータ上で比較することができるので、各資料の本文の独自性・誤写の発見がしやすいという点は特に重要な視点である(61)。古字書・古辞書の本文を研究する際には、影印で比較作業を行うことも多いのだが、いかんせん影印のままでは本文が読みにくく、細かい差異まで検討するにはやはり、本文同士を読みやすい形で処理してから検討した方がやりやすいことは、一度でもこの作業をしたことがある人なら分かるはずである。

3-2、第2部 書物学から写本へのアプローチ

第2部第3章では、原本調査を行ったうえで影印本も用いながら本文を検討するという伝統的な古字書研究の手法が展開される。特にこの章では、本文の文字訂正について原本閲覧したことで得られる情報をどのように役立てられるかが理解できる。本書 75 頁から 77 頁まで、これまでに原本閲覧した諸氏の見解が列挙されている。また、85 頁から 93 頁まで、影印本による先行研究が見逃しがちであった本文訂正箇所をすべて挙げており、原本および多くの影印本に詳しく目を通した著者ならではの作業結果が示される。『篆隸万象名義』の編者による本文訂正率により『篆隸万象名義』の編纂方針の傾向を考察するのは、数字で示されているだけに説得力がある。

同4章では、『篆隸万象名義』の近世写本について論じられる。周知のごとく『篆隸万象名義』の

原本には誤写・誤脱があるので、従来本文校訂の必要が指摘されてきた。しかし、近世写本だけでも多くの諸本があり、また現存最古の写本である高山寺本『篆隸万象名義』も容易に閲覧できない現状の中、近世写本まで用いた校訂作業をする研究者がいなかった⁴。そういった中で、今回の李氏の校訂作業は大変ありがたい研究である⁵。この作業により、近世写本が成立した後で高山寺本『篆隸万象名義』の修繕があったことや、近世写本が高山寺本の虫損箇所判読のヒントになることなどに加え、写本作成態度を知るうえで重要な視点も提示される⁶。

3-3、第3部 デジタル化による写本の本文研究について

第3部第5章では、掲出字（見出し字）の認定について論じられる。古字書は基本的に掲出字+注文という構成を取るが、総掲出字数の計上やある漢字を掲出字として認めるかの認定は意外に難しい。特に写本で伝わった本の場合は重出や誤写がつきものなので、こういった認定に迷う例が続出する。『篆隸万象名義』の場合、先行研究では約16,000字とされる。掲出字数を確定できないのは研究者によって掲出字の認定基準が一致していないことを物語る。著者はこれを「埋字」と「脱字」という基準を設けて一々整理し、掲出字の認定をしていく。明確な基準を立てて掲出字認定をすれば、その計上はブレないことになるので、今後の掲出字計上の指針となるべきものである⁷。なお、埋字と脱字については、認定したものの全例が本書152～194頁に附表として示されており、追試が容易にできる。

同第6章は、掲出字の「重出」（重複掲出）について論じられている。著者も述べるように重出自体は、『篆隸万象名義』に限らず、他の古字書・古辞書においても普通に見られるもので、珍しくはない。しかし、古字書の本文研究の際においては重出された掲出字をどう扱うかは難しい。というのも、重出されている掲出字同士が微妙に字形を異にしていたり、重出の掲出字に付けられたそれぞれの注文の内容が相違していたりするからである。そういった場合、単純に片方を重複として無視するわけにはいかなくなる⁸。著者は本章で、『篆隸万象名義』だけでなく、原本『玉篇』での重出まで遡

⁴『篆隸万象名義』本文全体の校訂は本書にも紹介されているように、呂（2007）がある（12）。但し、呂氏は日本の近世写本は資料として用いていない。呂（2007）の凡例には《篆隸万象名義》校釋）在中華書局影印本《名義》（中野注：『篆隸万象名義』的基礎上、以東京大学影印本《名義》為依拠（以下略）とある。東京大学影印本とはどの本かよく分からなかったが、これは『高山寺古辞書資料 第一』を指していることと李氏よりご教示いただいた。東京大学OPACによれば、史料編纂所に高山寺本の複製本があるのだが、これとは違うらしい。

⁵近世写本十三本のうち、五本は未見とのこと。富岡鉄斎旧蔵本と高野山本の閲覧は難しそうだが、他は必要手続きさえとれば閲覧できそうに思う。大勢には影響しないかもしれないが、統考を待ちたい。また、本章の最後に著者は「学術の利用には原本調査が不可欠である」（123）と述べるが、これは『篆隸万象名義』の「本文」研究をする場合は原本調査が不可欠であると読み替えた。理想的には『篆隸万象名義』を研究で使用する場合は、どのような研究でも一度は原本を見ておきたいが、著者も述べるように現実的には国宝指定の典籍の原本は誰でも簡単に見られるものではない。したがって、文字研究や音韻研究で『篆隸万象名義』を使う研究者にまで原本閲覧を求めするのは難しい。そのためにも、本文訂正を含めた信頼できる全体の校訂本を著者に今後作成していただけたらと後進の研究者としては大変ありがたい。先述のとおり（本稿注4）、『篆隸万象名義』の校訂本には呂（2007）があるが、本書第7章242頁で翻字方針に問題があると指摘されている。

⁶この視点は、他の古字書・古辞書の近世写本を見るときにも非常に参考になる。たとえば、『字鏡』『字鏡集』『新撰字鏡』『類聚名義抄』などにも近世写本がある。また、『篆隸万象名義』の価値に気づいた、清朝駐日公使随員の楊守敬の書き込みについても本章で書き込みの種類別に整理されている。楊氏の研究などは、近世から近代にかけての字書研究の先駆けと言うべき研究で、対象の字書は違えども日本の狩谷掖斎や伴信友ら国学者達の研究などと比較してみても面白いと思う。

⁷掲出字数の計上は他の古字書でも行われているが、基準を明示しないまま字数が掲示されることが普通になっている。今後は少なくとも、研究対象とする各古字書の性格を踏まえたうえで、掲出字計上の基準が示されるべきである。欲を言えば、どの古字書にも適用できるような共通の基準を立てたいが、可能であろうか。本書134頁の注50にも言及があるが、本書に言う「埋字」現象は他の古字書・古辞書にも多い。今後掲出字の曖昧な認定のもとで古字書研究が進まないように、基準の選定が急がれる。

⁸今回の重出現象とは直接かかわらないが、古字書に重出が生じる一因としては日本の古字書の典拠の用いられ方があると考えら

る形で慎重に論を進める⁹。本章では重出を考える際に章題にもあるように、字体と字種によって二つのタイプに分類している¹⁰。従来の研究においては、重出についてこのように漢字のカタチからタイプを分けるということは無かったように思われる。

同第7章は、掲出字の同定に関して具体的な例示とともに、同形異字つまり字形が同じでありながら、音・義が異なっているため別字と認定すべき漢字の翻字を、どのように処理すべきかという情報処理的な問題を中心に展開される。古字書の掲出字を翻字する際には、見た目のまま翻字する方針と、音・義を踏まえて翻字する方針とがある。掲出字だけを見ると、前者の場合は、同じ掲出字がたくさんあるように見えてしまうし、後者の場合は、実際の掲出字の形からは離れてしまい、原本を見ないと実現された形態が分からなくなってしまう。このように、翻字という作業が入ると、どうしても翻字者の方針による差異が生じる。本章では古字書のデータ化の際の漢字処理に階層化という手続きを取り入れる¹¹。

同第8章では、『篆隸万象名義』の漢字による義注について論じられる。本章では漢字二字以上の義注を「漢文節」とし、原本『玉篇』との関係を中心に論じる。著者が述べるように、『篆隸万象名義』の義注は多くが漢字一字に也を付けた形式(～也)となっている。漢文節の義注は漢字一字の注に比べると数量的に見れば『篆隸万象名義』の中ではやや少ない(著者の計算によれば、『篆隸万象名義』約16,000項目中7,500項目に漢文節の注があるとのことであるから、半分近くの掲出字に漢文節の注があることになるので、漢文節の注文は決して稀な形式ではない)¹²。この漢文節の注は、著者によれば身体・音律・飲食・住居などに関わる特定の部首に頻出するという。この偏りの指摘は本文の成立過程や編者の問題とも絡んでおり興味深い¹³。

れる。日本の古字書と典拠との関係については、大槻(2019)を参照。

⁹ 本書は『篆隸万象名義』を取り上げるものだが、いつでも原本『玉篇』への目配りがある。そして、原本『玉篇』の原態を窺える材料が『篆隸万象名義』に見られれば、それを見逃さず言及する。いかに両者が密接にかかわっているかが分かる。

¹⁰ 漢字字体等の研究者にとって、書体・字体・字形・字種概念の確認するまでもない事項であろうが、慣れない読者のために、どういったものをそれぞれが指すのか、注があればありがたかった。なお、本書11頁に用語の説明があるが、もう少し詳しい説明があればなお親切か。

¹¹ 本書239頁の注61では、『高山寺古辞書資料』に収録された『篆隸万象名義』の索引の翻字方針の不統一が指摘されている。索引というのは特定の目的を持って作られるので、あらゆる用途に完全に適合する索引というのは無い。しかし、翻字方針を統一させた新しい索引をぜひ著者をお願いしたい。

¹² 著者は漢文節の注について、その典拠が原本『玉篇』であり、元を更に辿ると原本『玉篇』に引用されている諸典籍となっていることから、『篆隸万象名義』の漢文節の注を「類書」とする。そして、漢字一字の注を「字書」とし、『篆隸万象名義』の注は二つの性格を有すると述べる(251)。確かに原本『玉篇』は多くの典籍を用いており、典拠名も出しながら原典の本文を尊重する意味で類書めると言える(類書めるとはつまり、注が詳しいか否かというよりも典拠が何であるか、どの本の本文であるかを重視する形式であるということ)。しかし、『篆隸万象名義』の場合は原本『玉篇』の類書的な注を、典拠名を出さずに、しかも多くの注文を省略して摘記している。この摘記の方法では、『篆隸万象名義』だけで原典が何であるのかを利用者が知ることが難しく、原典の本文を尊重した態度とは言えないのではないか。例えば本書の263頁の例で言うと、『篆隸万象名義』において「工」字に対し、「善事也、官也、巧也」という注がついているが、原本『玉篇』での典拠が善事也は『毛詩』毛伝、官也は『尚書』孔安国伝、巧也は『韓詩』となっている。この場合、『篆隸万象名義』においてすべて典拠名は削られているので、善事也という注だけが類書めるとは言えないと思われる。字書めるとされる、官也、巧也という注にも本来典拠が明示されており、これなども類書めると言えるのではないか。したがって、私としては、『篆隸万象名義』の注は典拠を示しておらず、元の原典の文脈からも切り離されていることから、注すべてを字書めると判断すべきと考える。本書にも引用されているが、白藤(2006)は、「出典名はすべて略し、辞書の注を徹底しようとしたものである」と述べており、この立場に私は賛同する。これについて、李氏より『篆隸万象名義』の作り手としては注文の典拠が分かっているのだから、典拠名を取り払われたとしても、本質は類書めると見たいという回答を得た。注文の性質を考える際に、作り手目線に立てば確かに李氏の言うことに理由があると思われた。また、字書・辞書が現代とは違い、個人的なものであった可能性を考えると、作り手目線で注文の性質を考えるべきかもしれない。注文をどの立場からとらえるかは単純な問題ではないので、ここではこの点について応答があったことを記しておくに止める。

¹³ 『篆隸万象名義』において、漢文節の注の偏りがなぜ生じているのかの答えは、私には読み取りにくかったのだが、李氏より「空海の関心」と「教育的啓蒙」がその理由であるとの回答を得た。私の読解力のなさが問題であるが、もう少し明確に書いていた

同第9章は、『大乘理趣六波羅蜜經釈文』に引用された『玉篇』逸文を用いて、『篆隸万象名義』の本文について考える。逸文そのものは当然貴重だが、この逸文により『篆隸万象名義』において、『玉篇』の反切上字が見出し字になっている例などが提示されている(283)¹⁴。

4、他に気づいたこと

本書12頁には、『玉篇』についての先行研究が、文字学的方法による研究と情報処理学的な研究とに二分され紹介される。『玉篇』に関する研究は、他分野に横断する多彩な研究が多く、まとめにくい部分があるのであるが、例えば澤田達也氏の「原本『玉篇』収録字の依拠資料」は文字学のかと言われればそうではないかもしれないが、貞苜伊徳氏の典拠論などの論文が紹介されるのであれば、こちらも『玉篇』研究として取り上げられてもよかったのではないか¹⁵。また、鈴木慎吾氏の「篇韻データベース」にもぜひ触れていただきたかった¹⁶。これなどは情報処理的な研究として重要な業績である。もし本書の続編あるいは改訂をされることがあれば、先行研究の紹介はさらに充実させていただけると、『玉篇』の現在の研究水準を知るうえで、大変貴重な手引きとなることは間違いない。

また、凡例に本書が用いた影印本が示されているが、今日においては古くなってしまった影印本が使用されているのが気になった。原拠論文が発表された年との兼ね合いもあるが、論旨に大きく関わらないとしてもこの点はやや不安を覚える。例えば、観智院本『類聚名義抄』は、新天理図書館善本叢書の影印本を使った方が良いし、『大宋重修広韻』についても、藝文印書館の影印本(周祖謨氏校注)も良いが、上海人民出版社の『新校互注宋本広韻』(定稿本。余廼永氏校注)の影印本を用いたほうが、字体に関する注だけでなく、又切等などの注も多いので研究上気付けることが多い可能性がある。

影印本の話に付随して、結局『篆隸万象名義』の本文を見る際には、どの本を使うのが現状でベストなのかを著者からお教えいただきたかった¹⁷。また、こういったところに気を付けて『篆隸万象名義』を使えばよいのかも慣れていない読者に向けて示してもらえたらありがたかった。そういったことは、実際に資料を使いながら体得していくものというのがこれまでの国語学でのいわば常識だが、著者に利用の指針を示していただけると、使う際に非常に参考になったはずである。そのあたりのことを別考で示していただけたら幸いである。

5、おわりに

本書「はじめに」の冒頭で、著者は本書を「情報学、書物学、文字学の三つの視点から本文読解へ

だけと私としてはありがたかった。

¹⁴ 反切上字が見出し字になってしまうということが生じるメカニズムは何なのであろうか。こういった作業をしているとそうなるのか、誤写が生じる理由も気になることである。

¹⁵ 本書でも取り上げられている田中(2022)には、日中の『玉篇』研究の主要なものが網羅されているので、現在の『玉篇』研究の水準を知るうえで良いガイドになる。

¹⁶ このデータベース中の宋本『玉篇』の検索システムはHDICに拠っているとのことなので(同HP)、HDICの説明が重複すると著者はお考えになったのかもしれない。しかし、研究の広がりという点において、やはり紹介および説明があっても良かったのではないと思われる。

¹⁷ 本書9～10頁にかけて四種の影印本の紹介があるが、可能であれば現在出版されている影印本をできる限り収集し、それぞれの関係や長所・短所を教えていただけると、今後『篆隸万象名義』を使おうとする者にとってありがたい。

とアプローチする古辞書研究である」(序文)とする。これまで見てきたごとく、これら三つの視点から多彩な手法で『篆隸万象名義』にアプローチしており、今後さらなる古字書研究の手法の深まりを予感させる¹⁸。李氏の研究はどれも結論が手堅く実証的なのだが、新しい研究手法を開拓しそれによって研究結果を示し、それを後続の研究者に見本として提示してくれる。その新手法は他の古字書・古辞書研究にも適用できることも多く、同じ分野を研究する者として大変ありがたい。

『篆隸万象名義』や『玉篇』の研究は日中両国で近年再び活発化している。両国の字書研究の最新の議論に詳しく、それらの研究に十分目を配れる研究者は国語学・情報学の世界に多くないであろう。語学が堪能な李氏はそういった研究者の一人である。

[参考文献]

- 大槻信 (2019) 『平安時代辞書論考：辞書と材料』 吉川弘文館
澤田達也 (2012) 「原本『玉篇』収録字の依拠資料」『開篇』(31) 好文出版
白藤礼幸 (2006) 「玉篇と篆隸万象名義」『書籍之路與文化交流国際學術検討會 要旨集』
田中郁也 (2022) 「宋本『玉篇』内部構造の分析」『日本漢字學會報』(4) 日本漢字学会
呂浩 (2007) 『篆隸万象名義校釋』 学林出版社

[使用文献・データベース]

- 鈴木慎吾 「篇韻データベース」 <https://suzukish.sakura.ne.jp/search/> (最終閲覧日：2023/12/01)
天理大学附属天理図書館編 (2018) 『類聚名義抄 観智院本』(新天理図書館善本叢書) 八木書店
余廼永 (2008) 『新校互註宋本廣韻』(定稿本) 上海人民出版社
李媛 (2023) 『空海の字書 人文情報学から見た篆隸万象名義』 北海道大学出版会 (18,000 円+税)

(なかの・なおき 本学教員)

¹⁸ このように多彩なアプローチがなされているので、本書のタイトルにある「人文情報学から見た」というのは、タイトルから受け取った読前のイメージとやや一致せず、タイトルが少々狭いのではないかというのが私の正直な感想である(もちろん、すべての章に情報学的な手法が取り入れられているのは分かる)。著者が本書で展開する内容はもっと広い。ただ、編集元からタイトルにも注文が入るのであろうから、これは著者としては致し方ないのかもしれない。